



## はだかの王さま (16)

さて、うそつきどもは、前よりももっとたくさんのお金<sup>かね</sup>と、絹と、<sup>きん</sup>金とを願い出しました。そういうものが、<sup>たんもの</sup>反物を織るのに必要だというのです。ところが、それをもらうと、みんな、自分たちのさいふの中へ入れてしまいました。ですから、機の上には、あいかわらず、糸一本はられません。それでも、ふたりは、前と同じように、から



## はだかの王さま (17)

っぱの機におかっ、せっせと働  
きつづけました。

皇帝は、まもなく、今度は、べ  
つの正直なお役人をやって、仕事  
はどのくらい進んでいるか、織物  
はもうすぐできあがるか、見させ  
ることにしました。このお役人も、  
大臣とおんなじでした。何度も何  
度も見なおしましたが、なんにも  
見えません。からの機のほかには、



## はだかの王さま (18)

---

なにもないので、それもむりもない話です。

「いかがでしょう。美しい織物ではございませんか」

ふたりのうそつきは、こう言って、ありもしない美しいがらを指さしながら、説明しました。

「おれが、ばかだなんてはずはない」と、この役人は考えました。

「そうすると、このおれは、いま

---



## はだかの王さま (19)

の、ありがたい役目に向いていない  
というのか。おかしい話だな。  
だが、人に気づかれんようにしな  
くてはまずい」

そこで、見えもしない織物をほ  
めて、きれいな色合いも、美しい  
がらも、すっかり気に入ったと、  
うけあいました。そして皇帝には、  
「はい、まことに、たとえようもな  
いほど美しいものでございます」



## はだかの王さま (20)

と、申しあげました。

町の人たちは、寄るとさわると、  
このすばらしい織物のうわさばかり  
してしていました。

さて、皇帝も、その織物が機に  
あるうちに、一度見ておきたい、  
と思いました。そこで、えりぬき  
のご家来を大ぜい連れて、ずるい  
うそつきどものところへ行きました。  
た。

つづく